

## 道化と狂気（その3）

裸の王様「リア王」 中村浩路

### (1) はじめに

「リア王」では、開幕早々から、あらゆるものが巨大なエネルギーをもって、解体・分裂へ向かって突進する。最初に登場したケント、グロスターの2人の老臣の話題も、まず王国の分割に関するものである。

Kent I thought the King had more affected the Duke of Albany than Cornwall.

Gloucester It did always seem so to us. But now in the division of the kingdom it appears not which of the Dukes he values most...  
(1.1.1-5) ※(以下、下線筆者)

※(引用はすべてNew penguin Shakespeare King Lear ed.By G.K.Hunter により、訳文は紙面の都合で省略した)

そして王国分割については、そのあとに続いて登場したリア王自身の口から、次のような言明がある。

Lear Give me the map there. Know that we have divided  
In three our kingdom:... (1.1.37-8)

悲劇「リア王」の種はまかれた。J.D.Wilsonの指摘にもあるように、  
And Jesus knew their thoughts, and said unto them, Every kingdom divided against itself is brought to desolation; and every city or house divided against itself shall not stand: (Matthew, chapter 12.25)  
という不吉な調子が聞こえてくる。この分割のテーマを基調にして、この劇の色々な模様が織り出されてくると言える。

愛の争い、親と子の争い、兄弟姉妹の争い、正気と狂気の争い、正統と異端の争い、人間(小宇宙)と自然(大宇宙)の争いである。しかも一度分割された王国は、宇宙的混乱と合体して、最後まで秩序は回復することなく、その再統一はあとに残された若き世代に託されて終る。

Lear ..... ; and tis our fast intent

To shake all cares and business from our age,  
Conferring them on younger strengths, while we  
Unburdened crawl toward death. (1.1.38-41)

Edgar The weight of this sad time we must obey; (5.3.321)

あらゆるものが、宇宙の構成要素(element)に還元され、むき出しの裸の姿にされてしまう。自然だけではなく人間も、地・水・風・火の猛威にさらされ、あらゆる虚飾をはぎ取られて、一箇の「もの」(thing)にすぎないことがあばき出される。そのような存在と化した人間を支えるものは何か。everythingの存在であると考えられる王位から、無(nothing)の存在になっていくことにより、人間存在の根源の愛に目覚めるリア。世俗を代表する存在の頂点から、あらゆる外被をはぎ取られて、真の人間の姿を、あるがままに、見てとれるすぐれて倫理的な一人の人間へと変ったリアの、ハダカにされるモチーフに焦点を当てて小論を展開することとする。

(2) 分割と無(Nothing)

王国を分割しようという王の狙いは、「若き世代に全てを委ねて、安心して死出の旅路を辿ること」であった。ところが、それが引き金となり、王としての実権を失い、部下の数は削減され住居を追われ、王衣をみずからの手ではぎ取り、王冠の代りに野の草花で編んだ冠をかぶり、狂気となり、ついには、最愛の娘コーディリアに先立たれ、自己の命も失ってしまう。

王一族の分裂は、王と臣下のそれを誘い、グロスター親子のように他の親子兄弟の分裂を生み出す。しかもそれがすべて、「あべこべ」の方向に向けて行われる。リアを愛するコーディアは勘当され、忠臣ケントは宮廷から追放され、親思いのエドガーは命をねらわれる。こうしたこと一切の原動力となったリア王は、壮烈な勢いでNothingの状態に落ちこみ、王としてのidentityを失う一方で、一人の人間としてのidentityを取り戻していく。小宇宙は大宇宙に響き合いながら、根源的なものに解体・分解されて、中心を失い、相互関係を奪われて、互いにバラバラの存在にならざるを得ない状態が生じる。

「リア王」においては、NothingとNatureが2つのKey Wordであることは、早くから多数の人によって指摘されている。Nothingの現れる一番有名な場は、例の領土分割の場で、リア王が3人の娘たちに父をどれだけ愛しているかをたずね、その返事によって与える領土を決めようというところである。ここには、言葉では表現し得ぬものとしてのコーディリアの愛があり、それを口に出して表現すればNothingに成るという驚くべきパラドクスがある。しかし、王にとってこそ思いもかけぬこの語であっても、観客にはそこに到る道程が、コーディリアのワキゼリフの形でぼんやりとは示されている。シェイクスピアの周到な劇的技功が伏せられている所である。

Lear…… Tell me my daughters.

Since now we will divest us both of rule.

Interest of territory, cares of state,

Which of you shall we say doth love us most,

That we our largest bounty may extend

Where nature doth with merit challenge. (1.1.48-53)

という父の間に答えるゴネリルの返答。いわばloveの値ぶみ、せり市、物量化の始まりである。この姉の言葉を受けたコーディリアの最初のワキゼリフは

Cordelia(aside) What shall Cordelia speak? love, and be silent.

である。姉の雄弁さに何ら実態が伴わないことは誰の目にも明らかである。しかしただ1人、リア王だけにはそれが分らない。王は、loveという言葉(word)に、loveの実態(matter)が含まれているかのように錯覚する。使用される言葉は同じloveでも、姉のそれには実態がなく、妹のそれには表現が与えられぬ。次の娘のリーガンもゴネリルの言葉をさらに空虚に飾りたてたloveの言葉を父に毒液のように浴びせかける。彼女の言葉が実行不可能なnothingであることは、あとの99行から104行のコーディリアのセリフの中で徹底的にあばかれる。この劇の中でも、もっとも大きく、決定的な分裂・解体は、wordとmatterの分裂・解体である。

リーガンの言葉を聞いたコーディリアは、

Cordelia(aside) Then poor Cordelia!

And yet not so, since I am sure my love's

More ponderous than my tongue. (1.1.76-8)

と述べて「舌にのせられぬほど重い愛」を再確認する。そしていよいよ決定的な言葉が口をついて出る瞬間を迎える。

Lear …… ; what can you say to draw

A third more opulent than your sisters'? Speak

Cordelia Nothing, my load.

Lear Nothing?

Cordelia Nothing.

Lear Nothing will come of nothing. Speak again.

Cordelia Unhappy that I am, I cannot heave

My heart into my mouth. I love your majesty

According to my bond, no more nor less.

Lear How, how, Cordelia! Mend your speech a little

Lest you may mar your fortunes.

Cordelia Good my lord,

You have begot me, bred me, loved me.

I return those duties back as are right fit,

Obeys you, loves you, and most honours you.

Why have my sisters husbands, if they say

They love you all? Haply when I shall wed,

That lord whose hand must take my plight shall carry

Half my love with him, half my care and duty.

Sure I shall never marry like my sisters.

To love my father all.

Lear But goes thy heart with this?

Cordelia Ay, my good lord.

Lear So young, and so untender?

Cordelia So young, my lord, and true.

Lear Let it be so! Thy truth then be thy dower! (1.1.85-108)

「2人の姉よりも、もっと富裕な残り3分の1の分け前を引き出すために」コーディリアが口に出せる言葉は何か。彼女の口からもれるのは“Nothing”のただ一言。この劇の基調となる言葉の一つである。コーディリアの言葉はそれぞれの姉の言葉に觸発されて出てきたものでありながら、表現としては「沈黙」の方向へ進まざるを得ないほど、心の中にしっかりと根をはった重いloveであった。特に父の問いが、「姉よりも豊かな分け前を引き出すために」であったから、それに対しては今更口にするべきことは「何もない」と答えるより他にすべがない。父と同じ言葉を口にしながらも、コーディリアの言う“Nothing”は“love”という言葉の含む実体・行為の重味がheartから垂直にmouthまで引き上げられないほどなのである。文字通り愛のsubstanceが実在することを我々はまぎれもない事実として認めることができる。コーディリアのNothingの中ではすばらしい愛が息づいている。この言葉こそ全てを生み出す愛の種子である。

(3) セリフの呼応

劇が進行するにつれて前のセリフとの様々な響き合い・共鳴が多く起るのもこの「リア王」の特色の一つであろう。その効果、反響が、いつまでも観客や読者の心の中に鳴り渡るのはNothingだけではない。そもそも「リア王」全体が、一つの交響曲であり、一見雑然と並べられたようなセリフが意外な所で絶妙な呼応をして、我々の魂を感動させる。数多い例の中から、上のコーディリアの“Unhappy…… nor less”の反響を聞いてみよう。

Kent                         Made she no verbal question ?  
Gentleman      Faith, once or twice she heaved the name of father  
Pantingly forth, as if it pressed her heart,  
Cried Sisters ! Sisters ! Shame of ladies ! Sisters !  
Kent ! Father ! Sisters ! — What , i' the storm ? i' the night ?  
Let pity not be believed ! ' .....                         ( 4 . 3 . 24—29 )

コーディリアの深い愛情に支えられた不言実行型の性格が、“heaved”, “heart”の組み合わせや、簡潔な言葉使いを通して、より一層鮮やかな姿をとって我々の前に現れる。下のリアのセリフは、コーディリアのものではなかろうかと錯覚させられるほどである。これらすべてのセリフが、過去を呼びさまし、前のセリフ、ひいてはその解釈をより豊かに、新鮮に、そして壮大なものにする働きをしているのである。嵐の場のリアや、狂ったリアに、真のリアリティを与えているのも、こうした単音節の語からなる日常的な言葉であり、そこに雨や風に翻弄される生きた肉身を持つリアの存在を我々は実感する。まさに言い過ぎもしなければ、言い足りないこともないwordとmatterの一本化にほかならない。

片意地なほど言葉と行為の一本化を求めるコーディリアにとっては、父の“Mend your speech”という言葉は到底受け入れられない。実体が変われば言葉も変えられず、その逆も同じことである。コーディリアにとっての愛の実体は、上の1幕1場の96行から98行にかけてこの上なく明確に述べられている。もちろんすべて事実であり、実行可能なことである。そして、そのような愛の言葉を述べたために父から勘当される。それについてケントは次のように語る。

(To Cordelia)

(To Goneril and Regan)

He'll shape his old course in a country new. (Exit)  
(1.1.180-187)

(Enter Oswald)

Oswald My lady's father. (1.4.77-8)

もはや王ではない。単に一人の娘の父親にしかすぎない。この指摘はさらに Fool の手によって容赦なく続行され、ついに狂気へ到る道につらなる。

Lear Dost thou call me fool, boy?

Fool All thy other titles thou hast given away; that thou wast born with. (1.4.146—8) (cf. 4.6.184)

Fool ..... Now thou art an O without a figure.

I am better than thou art now; I am a fool; thou art nothing.  
(1.4.188—9)

Lear Who is it that can tell me who I am?

Lear's shadow. (1.4.226—7)

ついに零の存在から負の世界(影の存在)へと入りこみ、すでに狂気の戸口へ立った。

娘ゴネリルも無の存在にしてくれと、自然に向かって、不毛・不妊の呪いを頼む。

しかし、自然の外気の嵐に吹きさらされ、精神的暴風雨ともいえる狂気に捕えられて初めて、王位にあった時の自分が、口先だけで実行する気のない (to speak and purpose not—1.1.225) 連中の flattery にかこまれた、いかに哀れな存在であったかを知る。自分とは何かを問い続けて、「人間とは何か」の問いに到達し、その解答をつかみ始める。

(5) 衣裳とハダカ

さて、最後に、リア王が lendings や additions を次々とはぎ取られて、表面的には裸になりながら内面的には一步一步豊かで充実した人間へと変っていく過程について述べておきたい。

第1幕第1場で、老後の頼りにと思っていたコーディリアを勘当することにしたリア王が次のように述べる。

Lear ..... Only we shall retain  
The name and all th'addition to a king; the sway,  
Revenue, execution of the rest,  
Beloved sons, be yours; which to confirm,  
This coronet part between you. (1.1.134—8)

王権の実体を放棄して、王という名前だけを維持しようとする。その奪冠の具体的動作として、恐らくコーディリアに与えようと予定していた宝冠をゴネリル、リーガン夫妻の間で分割せよと言う。この宝冠分割という象徴的モチーフは Fool により道化帽に格下げされ、(1幕4場)、その次にはタマゴの殻にまで落しめられる。(1幕4場153行以下参照)そして、ついに何もかぶらずに嵐の中をさまよい歩くリアの姿となる。

Gentleman This night, wherein the cub-drawn bear would couch,  
The lion and the belly-pinched wolf  
Keep their fur dry, unbonnetted he runs  
And bids what will take all.

Kent But who is with him?

Gentleman None but the Fool, who labours to out-jest  
His heart-struck injuries. (3.1.12—16)

(当時は無帽で人中へ出るのは着物をまとうずに戸外を歩くのと同じように考えられていたという。)そして、リアが完全な狂人となった4幕6場では、野の草花で編んだ(恐らく王が手作りの)冠をかぶって登場する。80行目のトガキによると Enter Lear fantastically dressed with wild flowers となっている。ボロをまとい草花の冠を頭に、度重なる





犬や馬やねずみの命と比較されることで、彼女の生命の消えたことがますます痛感させられて、その喪失感と虚しさは、Neverの5回のくり返しに凝縮する。「お願いだからこのボタンをはずしてくれないか。どうも、ありがとう」王の願いを聞いて王の胸のボタンをはずしてやるのはケントであり、それが彼の最後の御奉公であろう。そしてリアはコーディリアが生きていると歓喜しながら息を引き取る。その安らかな死顔を見れば、我々もケントと同じように、

Kent      Vex not his ghost. O, let him pass. He hates him  
              That would upon the rack of this tough world  
              Stretch him out longer. (5.3.311-3)

と祈らずにはおられない。

上のリアのセリフの中にこそ、この演劇全体を支える両面価値的な統一性、すなわち、喜びと悲しみ、否定と肯定、生と死が、変化の両極（メタモルフォーシスの始めと終り）の姿をとって「世界の2つの様態（アスペクト）→厳粛と笑い」がその中に共存し、相互に互いを映し出している作品」（パフチーン）の結びの言葉として、しっかりとほめこまれている。自然と人生の時々刻々、転々と生成変化してやまぬアスペクトを伝達する「リア王」の言葉（表現）はまさに“Speak what we feel, not what we ought to say” (5.3.322)という至難の業となる。

（註） 参考書としては次の本に一番多くを負っている。

ミハイール・パフチーン著、川端香男里訳

「フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化」 1973年

せりか書房

（1975年3月31日脱稿）